この国はどこへ行こうとしているのか(5)

民主主義の危機を憂える気鋭の論客として活躍する作家の平川克美さん(64)が、ゆったりとした口調で、刺激的な一言を発した。「安倍晋三政権が今の国会でやろうとしているのは、ソフトなクーデターですよ」

「民主主義の基本は、手続きにのっとって物事の方針を決めること。問題の集団的自衛権ですが、歴代の内閣も、憲法学者も違憲であるという見解が一般的ですね。それでも安全保障関連法案を通したいのならば、憲法を改正してからやるのが筋でしょう。それなのに安倍政権は『日本を取り巻く安全保障環境が変わった』と憲法の解釈を無理やり変えようとしている。憲法の解釈が時の政権によって変更可能ということなら、法的安定性は喪失し、憲法は空文化します。歴代政権が守ってきた法治主義に対する一撃という意味でクーデターと言ったのです」

そもそも安保法案には反対論が根強い。野党の反発だけではなく、市民のデモが国会議事堂を取り囲む。それでも安倍首相は今国会での成立にこだわる姿勢を変えず、こう口にする。「熟議を尽くした上で、最終的に決める時は決める」と。安倍首相が強行裁決に踏み切るこの時こそ、平川さんは「ソフトなクーデターの第一歩になる」と見ているのだ。「これまでの自民党には『戦時経済はこうだった』とか、『治安維持法で世間の空気がどう変わった』などと、戦争を知っている政治家がいました。同時代を生きていたのです。だから戦争に向かうような動きが出ると、『あんな時代に戻りたくない』との思いから抑制する行動に出た。でも、彼らが引退した今の自民党にとって、戦争は想像の世界でしかなくなり、ブレーキが利かないのです」世代交代を止めることはできない。ならば、戦後生まれの政治家は何をすればいいのだろうか。「戦争を知っている世代の言葉を聞き、歴史を検証するしかない。歴史はいかようにも解釈できる面があるが、歴史を知る専門家の話に謙虚に耳を傾けることから始めることです」

「憲法はブランドなんです」「日本は70年間かけて磨いてきたブランドを前面に出していくのか、それを捨てるのか---。その選択を今の国会では迫られている。安倍首相は安保法案を成立させ、自衛隊を海外に派遣して積極的平和主義を実現すると説明する。そうでは、ない。憲法というブランドを海外に広め、その役割を知ってもらうことこそ、積極的平和主義と呼ぶべきではありませんか」。安倍首相の主張と真っ向から対立する姿勢はぶれそうにない。

(2015年7月14日)